

自ら学びの方法を選択し、意欲的に学びに向かう児童の育成
～学びのユニバーサルデザイン（UDL）を取り入れた算数科の授業を通して～

南風原町立南風原小学校教諭 當 銘 春 菜

I テーマ設定の理由

文部科学省(2023)の「特別支援教育の充実について」によると、直近10年間で義務教育段階の児童生徒数は1割減少する一方で、特別支援教育を受ける児童生徒数は倍増している。特に、特別支援学級の在籍数は令和4年度が平成24年度と比べて2.1倍、通級による指導の利用者数は2.5倍で、増加が顕著に表れている。また、文部科学省(2022)の「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」の結果から、学習面又は行動面で著しい困難を示すとされる基準に達していないが、基準近くに分布している児童生徒も一定数いるとのことから、学習面又は行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒以外にも特別な教育的支援を必要としている児童生徒がいることを念頭にどのような支援を行うことができるのか検討する必要性を述べている。

特別支援教育においては、全ての教育段階において、インクルーシブ教育システムの理念を構築することを旨とし、全ての子どもたちが適切な教育を受けられる環境整備や障害のある子とない子が可能な限り共に教育を受けられる条件整備等を進めており、一人一人の教育的ニーズに応える指導が求められている。さらに、中央教育審議会(2021)は、特別な支援を要する児童を含めて全ての児童の「個別最適な学び」を促しながら、これからの学校の在り方として、教師が専門家としての知見を活用し、子どもの実態に応じて、学習内容の確実な定着を図る観点を持ち、個々の興味・関心・意欲等を踏まえてきめ細かく指導・支援すること及び児童が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整できるようにすることを求めている。

これまでの私の通常学級での実践において、一斉指導の中で学習の定着の弱い児童や学習に気持ちが向かない児童に対して、十分な手立てができなかった反省がある。学級の中には、通級指導教室で専門的な指導が受けられる児童だけでなく、就学支援の判定基準に及ばないが学習面や生活面で困り感がある児童や、学習の理解が速くどんどん学習を進めたい児童等、多様なニーズや背景のある児童がいるため、個々に対応した授業を実践することができていないと感じていた。また、通常の学級の中でも多様なニーズや背景を有する児童生徒が増加しており、その対応が求められているが、一人一人の教育的対応の難しさを感じている。

そこで、本研究では、多様な学習者に対応し、学習環境を構築する学びのユニバーサルデザイン（以下UDLとする）に着目した。UDLとは、児童生徒が学びの方法を主体的に選択し、自分に合った学び方がわかり、意欲的に授業に参加する児童の育成ができる理論的枠組みである。さらに、児童同士で学び合える「協働的な学び」も積極的に取り入れ、互いのよさを生かし、共に成長できるような児童の育成も図ることができると考えられる。そして、2年生の算数科は、これから学ぶことの基礎・基本となる内容が多く、児童間で理解の差があっても、UDLの視点での授業を通してどんな児童も同じ場で学ぶことができるのではないかと考えて、取り扱うことにした。そこで、通常の学級において、UDLを取り入れた授業を行うことで、一人一人の教育的ニーズに応える指導と主体的に自分の学び方を選択できる児童の育成ができるのではと考え、本テーマを設定した。

Ⅱ 研究の目標

通常の学級において、UDLを取り入れた算数科の授業を行なうことにより、一人一人の教育的ニーズに応える指導と主体的に自分の学び方を選択できる児童を育成する。

Ⅲ 目指す児童像

学びの方法を主体的に選択し、自分に合った学び方がわかり、意欲的に授業に参加できる児童

Ⅳ 研究方法

- 1 小学校学習指導要領等を踏まえ、特別支援教育やインクルーシブ教育、UDLなどについて先行研究を行い、実践授業の計画を立てる
- 2 UDLを取り入れた算数科の授業実践を行う
- 3 事前・事後のアンケート分析、児童の言動や変容などから、目指す児童を育成することができたか確認し、改善を図る

Ⅴ 研究内容

1 「主体的に自分の学び方を選択できる」について

「主体的」という言葉の意味は、広辞苑によると、「ある活動や思考などをなす時、その主体となって働きかけるさま。他のものによって導かれるものではなく、自己の純粋な立場において行うさま」とある。小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編によると、第3節の「教育課程の実施と学習評価」では、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」の具体的な内容について三つの視点を挙げており、「これらを手掛かりに、質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けられるようにすることが求められている」と示している。「主体的な学び」については、「学ぶことに興味や関心を持つ」、「自己のキャリア形成の方向性と関連付け」、「見通しをもって粘り強く取り組む」、「自己の学習活動を振り返って次につなげる」という視点となっている。「主体的に自分の学びを選択できる」ことで、児童が学びの主体になり、理解するための過程を児童自身で考えたり、見つけたりすることが考えられる。その学習活動の中で、学ぶことに興味を持ったり、関心を持ったりして、自分に合った学びの方法を見つけることにつながると考える。さらには、自己の学習活動を振り返り、これからの学習にも生かすきっかけになるのではないかと考える。本研究では、算数科の実践において児童が学びのゴール（ねらい）に向けて、自分自身の理解の方法や学習定着のスピードによって教材や具体物、ワークシート、ICT機器等を上手に活用し、粘り強く取り組み、「できた」、「わかった」という姿が期待できると考える。そのために、児童や学級の実態を踏まえ、教材・教具の工夫や提示、ワークシートの活用、習熟度別の問題、ICT機器の積極的活用等を行っていきたい。

2 学びのユニバーサルデザイン（UDL）について

(1) 学びのユニバーサルデザインとは

学びのユニバーサルデザイン（Universal Design for Learning）とは、アメリカの非営利の教育研究開発組織であるCAST（the Center for Applied Special Technology）が提唱した、多様な学習者に対応できる学習環境を構築することで、自ら調整して学んでいける学習者（学びのエキスパート）を育てるための理論的枠組みのことである。本研究では、児童一人一人の実態を確認し、学びにアクセスする上で児童の困りや障壁となっているものを取り除いたり、軽減させたりできる

ように児童の実態把握を行う。また、児童から「これならできるかも」、「この方法でやってみたい」という自らの意思を引き出したりできるように児童との対話を進んでいき、それに伴って学習環境を整えることが重要であると考え、実践していく。

(2) 「学びのエキスパート」について

UDL Guidelines version2.0 では、学びのエキスパート (expert learner) を、「学びたいという気持ちを持ち、方略的に学ぶ方法がわかり、自分にあった柔軟なやり方で生涯にわたる学習に十分備えられている者」と表現している(図1)。UDLは、教育者がこの目標に取り組む手助けとなるよう、最初から全ての学習者のニーズに合った教育をどのように作っていくかを理解するための枠組みを提供すると述べている。

UDLによる授業実践をすることで、学習の目標を達成するために、児童が自分に合った学び方を知ることができる。本研究では、児童が主体的に学びに向かう姿や自分に合う学び方を選ぶ姿を目指したい。そのために、児童の実態把握を行うことや、学びのゴール(目的)に向かうためのバリア(障壁、困り)を作ってしまうように学び方のオプションや教材の提供を柔軟性を持って実践していく。

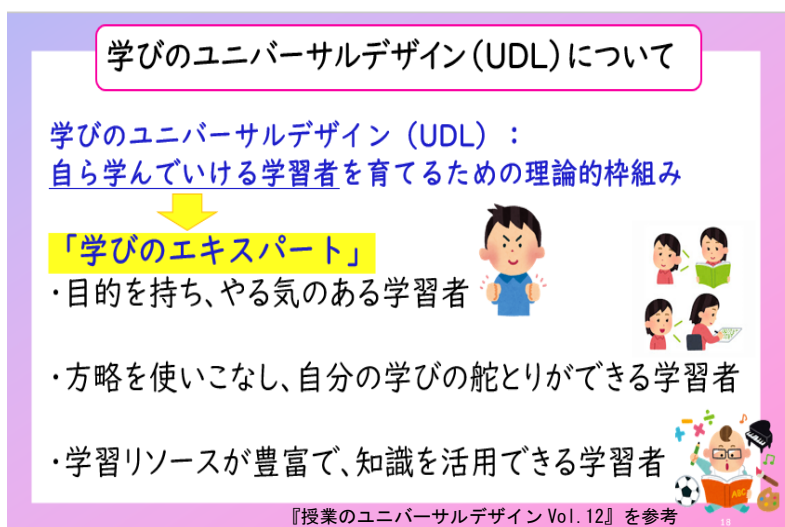


図1 学びのエキスパート

(3) UDLを理解するための3つのポイント

UDLの理解を助けるポイントとして、3つ挙げられている(桂聖、2020)。

① 障害があるのはカリキュラム

UDLでは、学習にかかる障害を子どもではなくカリキュラムにあると捉えている。発達障害の有無にかかわらず、多様な子ども達の学びを阻む原因は、「教えるゴール」、「教材」、「方法」、「評価(カリキュラム)」にあるという考え方である。

② 教えるゴールを明確にする

UDLの授業を実践するために最初にしなければならないのは、「子どもが何を学ぶのか(何を教えるか)」を明確にすることである。

③ 事前にバリアを見つけオプションを用意する

素晴らしい指導方法であっても、すべての子どもに最適というわけにはいかず、その中に障害(バリア)が生じうる。UDLでは、授業計画時にそのバリアを特定して、取り除くことができる代替方法(オプション)を準備することが重要である。オプションは1つに限らず、複数用意されることもある。

上記の3つのポイントをもとに授業の流れを考えた(図2)。まず、児童に何を学ばせたいか、教師が何を教えたいのかの学びのゴールを決め、同時に学習における児童のバリアを知り、原因等を探る。次に、ゴール達成のためのオプションの提供。事

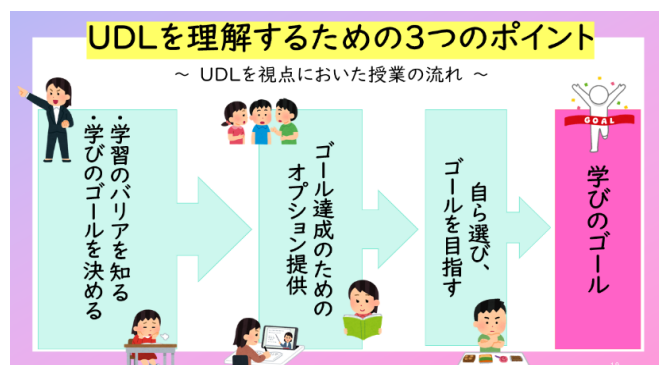


図2 UDLを視点に置いた授業構想案

前にバリアを見つけオプションを用意したり、学び方に柔軟性を持たせたりして提供していく。そして、オプションを児童自ら選択し、ゴールを目指して学習していく。教師は、児童一人一人の取り組みを確認しながら、声かけや必要に応じて個別指導などを行うこともある。

(4) UDLガイドライン

UDLガイドラインとは、UDLを踏まえた実践を実施するために必要な観点について、一覧表にまとめたものである。CAST(2011)では、UDLガイドラインは、UDLの3つの主原則（提示、行動と表出、取り組み）に沿って構成しており、授業実践等するにあたって、学習の目標、方法、教材教具、評価の方法を見極め計画して、すべての学習者が完全にアクセス可能な学習環境を作っていくための参考とするものになっている（表1）。

表1 UDLガイドライン表

【原則Ⅰ】提示(理解)のための多様な方法の提供	【原則Ⅱ】行動と表出のための多様な方法	【原則Ⅲ】取り組みのための多様な方法の提供
認知のネットワーク (「何を」学ぶのか)	方略のネットワーク (「どのように」学ぶのか)	感情のネットワーク (「なぜ」学ぶのか)
①知覚するための多様なオプションを提供する ・情報の表し方をカスタマイズする方法の提供(1.1) ・聴覚情報を、代替の方法でも提供する(1.2) ・視覚情報を、代替の方法でも提供する(1.3)	④身体操作のためのオプションを提供する ・応答様式や学習を進める方法を変える(4.1) ・教具や支援テクノロジーへのアクセスを最適にする(4.2)	⑦興味を持つためのオプションを提供する ・個々人の選択や自主性を最適にする(7.1) ・自分との関連性・価値・真実味を最適にする(7.2) ・不安要素や気を散らすものを最小限にする(7.3)
②言語、数式、記号のためのオプションを提供する ・語彙や記号をわかりやすく説明する(2.1) ・構文や構造をわかりやすく説明する(2.2) ・文字や数式や記号の読み下し方をサポートする(2.3) ・別の言語でも理解を促す(2.4) ・様々なメディアを使って図解する(2.5)	⑤表出やコミュニケーションのためのオプションを提供する ・コミュニケーションに多様な媒体を使う(5.1) ・制作や作文に多様なツールを使う(5.2) ・練習や実践での支援のレベルを段階的に調整して流暢性を伸ばす(5.3)	⑧努力やがんばりを続けるためのオプションを提供する ・目標や目的を目立たせる(8.1) ・チャレンジのレベルが最適となるよう(課題の)レベルやリソースを変える(8.2) ・協働と仲間集団を育む(8.3) ・習熟を助けるフィードバックを増大させる(8.4)
③理解のためのオプションを提供する ・背景となる知識を活性化または提供する(3.1) ・パターン、重要事項、全体像、関係を目立たせる(3.2) ・情報処理、視覚化、操作の過程をガイドする(3.3) ・学習の転移と般化を最大限にする(3.4)	⑥実行機能のためのオプションを提供する ・適切な目標を設定できるようガイドする(6.1) ・プランニングと方略の向上を支援する(6.2) ・情報やリソースのマネジメントを促す(6.3) ・進捗をモニターする力を高める(6.4)	⑨自己調整のためのオプションを提供する ・モチベーションを高める期待や信念を持てるよう促す(9.1) ・対処のスキルや方略を促進する(9.2) ・自己評価と内省を伸ばす(9.3)

〈一部参考にした資料〉UDLガイドライン全文(ver2.0)(CAST, 2011: パーンズ亀山・金子(訳))

UDLでは、「原則Ⅰ 提示のための多様な方法の提供」、「原則Ⅱ 行動と表出に関する多様な方法の提供」、「原則Ⅲ 取り組みに関する多様な方法の提供」の3つの原則から成り立っている。それぞれの原則はさらに細かく分かれており、合わせて9つの観点から自らの実践が観点を踏まえているかどうかを確認することで、UDLの枠組みから実践を見直すことができる。

本研究では、授業の計画段階から、実践、実践後の振り返り等で、授業がUDLに基づいているかを確認するために、上記のUDLガイドライン活用していく。また、単元計画にはUDLガイドラインの項目を記載し、一人一人の教育的ニーズに応える指導ができるようにした。

Ⅵ 研究の実際（授業実践）

1 単元名 「3けたの数」（全12時間）

2 単元設定の理由

- (1) 教材観（省略）
- (2) 児童観（省略）
- (3) 指導観（省略）

3 単元の指導目標（省略）

4 本時の指導（9/12時間）

(1) 本時のねらい（省略）

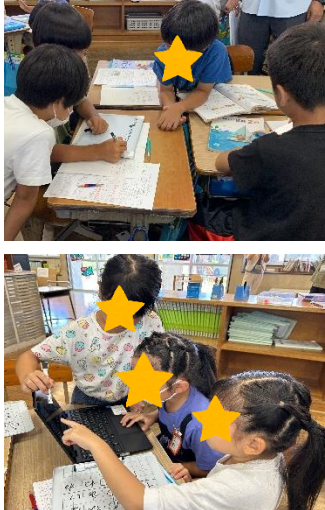
(2) 検証の視点

- ① 学習のゴール（目的）を明確に提示し、ゴールに向かうための多様な学びの方法（オプション）を提供できているか。
- ② 学習のゴールに向けて、自分に合った学びの方法を選ぶことができているか。
- ③ 教師や友達の話聴いたり、自分で考えたり、発表したりなどして、意欲的に授業に参加しているか。

(3) 本時の評価規準（省略）

(4) 本時の展開

	学習活動	○指導上の留意点 □予想される児童の反応	【評価基準】 ◆検証の視点 U UDLの視点
導入 6分	1 今日の問題を知り、めあての確認をする。 【問題】 $50 + 70$ のこたえはいくつですか。	○ノートに今日の問題を確認させ、今日のめあて（ゴール）を伝える。（黒板に板書をして提示）	U 座席の調整（7. 3） U 板書の工夫（1. 1）
	【めあて】 $50 + 70$ のこたえの出し方を説明する。 2 説明に使えるものがあるか考える。	○どのようにすると答えの出し方が説明できそうか、既習事項などを思い出させる。 □数カード、位取り表、まとまり、数の線を使った。 ○他にも絵や図、言葉を使って説明できる方法も提示する。	U 学習に意欲を持たせる言葉かけ（9. 1） ◆学習のゴールを明確に提示しているか。 

展開① 23分	3 50 + 70 のこたえの出し方を絵や図やカード、具体物を使い考えてみる。(発表があることも伝えて準備開始) 4 考えをまとめたものを発表する。 	○こたえの出し方を説明するために「だれと」「何を使って」「どうやって発表するか」選ばせる。 ○どうしたらいいかわからない児童に対して、机間指導の際、自分のできそうな方法を見つけられるように声かけをする。 ○個人やグループなどの考えを黒板や電子黒板に写して説明できるようにサポートする。 【予想されるこたえの出し方】 ☐ まとまりで考えた ☒ 例 50 + 70 は、10 のまとまりにすると、5 + 7 だから答えは12。10 のまとまりが12 ことで、120。こたえは120 になります。 ☐ 位取り表を使って考えた。 ☐ 数カードで考えた。 ○みんなのこたえの出し方で、すべての答えが120 になっていることを確認させる。 ○いろいろな方法で50 + 70 の計算ができることに気づかせる。	☒ 説明するため教具の提供(7. 1) ☒ 安心して考えられる場を選択できる(7. 3) ◆児童がゴールに向かうための多様な学びの方法を提供できているか。 ◆自分に合った学びの方法を選択できているか。 ☒ 説明の発表の仕方(前に出て・写真で見せる等)の選択(5. 2) 【思考・判断・表現】 何十±何十の計算の仕方を、数の構成に着目して考え、説明している。 ◆意欲的に授業に参加しているか。 ☒ 児童へ前向きな言葉かけやフィードバック。(9. 1)
展開② 6分	5 みんなから出た考えをもとにして、300 + 200 の問題を解いてみる。 6 きょうのまとめをする。 【まとめ】(例) こたえの出し方には、まとまりや図、位取り表などを使って考えることができる。	○自分の考え以外にも出てきた方法で答えを導いてもいいことを伝え、多様な考えを活用できるように促す。 ○児童から出た考えをもとにまとめを児童と一緒に考える。	【思考・判断・表現】 何百±何百の計算の仕方を、数の構成に着目して考え、説明している。 
まとめ10分	7 本時の自分の学習について振り返る。 ・振り返りシートの記入	○本時の学習でわかったことやできたこと、自分が行った学習方法を振り返り、感じたことを記録させる。	◆意欲的に授業に参加しているか。 ☒ 児童へ前向きな言葉かけやフィードバック。(9. 1)

VII 研究のまとめ（結果と考察）

研究の結果と考察については、これまでの授業実践、検証前・検証後のアンケート、振り返りシート、行動観察等をもとにして、UDLを取り入れた授業を実施することで見えた児童の変容3つの検証の視点に沿って分析をした。

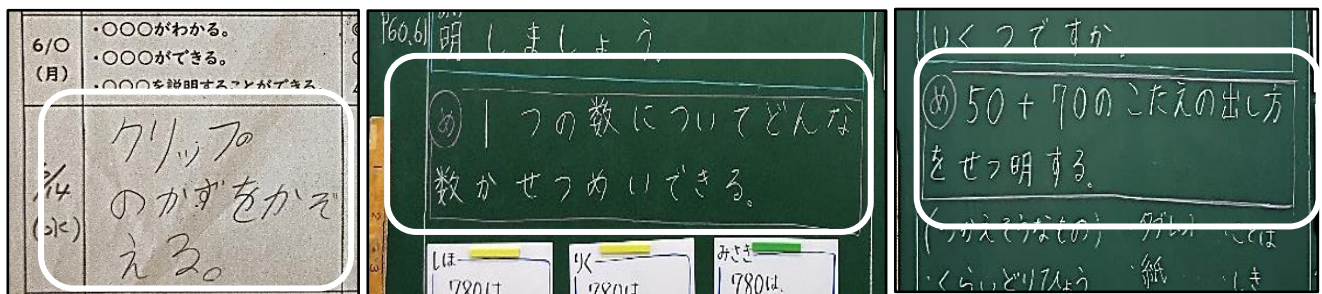
1 学習のゴール（目的）を明確に提示し、ゴールに向かうための多様な学びの方法（オプション）を提供できているか

全単元を通して、児童に「何を学ぶのか（何を教えるのか）」を明確にするために、教師が「学習のゴール（目的、めあて）を明確に提示」することと、授業計画時に「児童の学習がよりわかりやすくなる」、「主体的に学びに向かうことができるようなオプションの提供」を児童の実態把握をもとに留意した。

(1) 学習のゴール（目的、めあて）の明確な提示について

実践した授業の中から事例を挙げると、第1時では「クリップの数を数える」（資料1）、第8時では「1つの数についてどんな数が説明できる」（資料2）、第9時では「答えの出し方を説明をする」（資料3）を学習のゴール（めあて）として提示し、学習に取り組ませた。単元の指導目標から児童にわかりやすい、シンプルな表現になるように工夫した。

学習のゴール（めあて）の提示のタイミングは各授業内容で異なっていたが、その時間に目指すこと（何を学ぶのか）がわかると児童が戸惑うことなく、学習活動に入ることができていたと考える。UDLガイドラインチェック項目 (1.1) (7.1) (7.3) (9.1)



資料1 学習のゴール（第1時）

資料2 学習のゴール（第8時）

資料3 学習のゴール（第9時）

(2) ゴールに向かうための多様な学びの方法（オプション）の提供について

学習のゴール（めあて）を提示したあとは、その時間のゴールに向かうために児童には、様々なオプションの提供を行った。第1時では、200個を超えるクリップを数え、3位数の読み方や表し方を学習する。そこで、クリップを数える活動の際にツールでは、本物のクリップや教科書のクリップの画像をA4、B4、A3の3種類のサイズに印刷して提供した。それから、白紙やマジック、セロハンテープなど児童の学習活動を助けるものとして用意した。そして、数える活動を「1人で」「複数で」「机の上で」「机をくっつけて」など、自分が学びやすい方法を選択してやってもらった（写真1、2）。第9時では、「50+70の答えの出し方の説明」をするために活用できそうなものを既習事項から、考え方や教材を児童から出してもらった。児童の反応を予想して



写真1 クリップを数える様子



写真2 大きさの異なるワークシート

教師もオプションの準備はしていたが、児童が考える場面になると自ら持っている物（自分のノート、算数セットのホワイトボードなど）を使って考える場面も見られた（写真3、4）。

児童に学習のゴールを目指すための多様な方法を提供することで、友達と一緒に考えようとするものが多く見られた。普段は、1人や隣の席同士、または教師が意図的に決めたグループ（3、4人）で教師の指示のもと、話し合い活動等を行っていた。検証授業では、学ぶ場や誰と活動するかは指示はせずに、「めあてが達成できるために、自分がわかる方法を選んでやってください」という指示をしていた。自ら選択できるという経験をしていなかった学習形態だったが、第1時に方法として教師が提示していると、迷うことなく選択してくれた。さらに、教師が用意したオプションだけでなく、児童が「これも使っていいですか?」と進んで学ぼうとする様子も見られた。このような児童の姿から、教師の提示から、選択できる経験、そして学ぶ方法は1つではなく、自分に合った方法があり、それを活用できる経験を積み重ねることで、「こうしたらもっとわかるかも」や「これが考えるときに使えるそう」などの児童の主体的な動きが見られるようになったと考える。

UDLガイドラインチェック項目 (1.1) (2.5) (4.1) (8.2) (9.1)



写真3 提示したオプションの例

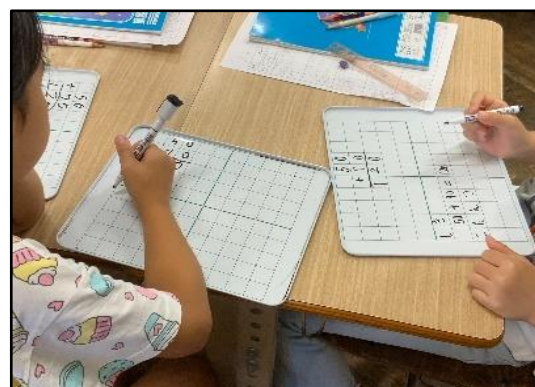


写真4 自分の教具を活用

2 学習のゴールに向けて、自分に合った学びの方法を選ぶことができる

学習のゴール（めあて）に向けて、児童には教師が提供したオプションや自らが必要だと思う学びの方法を選んでもらった。オプションには、考え方や学ぶ場、思考のためのツール（教具など）の用意をした。授業の流れは、学習内容によって多少の変動はあるが、基本的には、①問題提起→②本時のめあて提示→③活動→④まとめ→⑤練習問題→⑥振り返りで、主に③活動や⑤練習問題の時に、自分に合った学びの方法を選択してもらった。

検証授業の第3時では、学びのゴール（めあて）を「数カードを使って、数を表すことができる」にし、3位数の位取りの仕組みや数の構成を理解できるように指導した。その際に、児童は「1人で考える」、「複数で考える」、「1人だけど、ときに後ろの子と意見を共有する」など考える場面だけでも自分の学び方を見つけて思考する様子が見られた（写真5、6、7）。



写真5
一人で考える



写真6
友達同士で考える



写真7
教室全体の様子

また、理解の定着を図るため、練習問題を解く場面では、第4時では、タブレットを活用し教師が用意したサイトから個々の進度に合った問題を選んで進めた。児童はタブレットにとっても興味を示し、活用することで個別の学習を進めることに有効だと考え、検証授業で少しずつ導入することにした。特に、書くことが苦手、プリント学習で練習問題を解くことが苦手な児童にとっては、タブレットを活用すると集中して、設定した時間いっぱいに取り組む様子が見られた（写真8）。

第2時と第5時では、コース別の練習問題（ホップ・ステップ・ジャンプ）を教科書にあるものから作成し、ホップ（基礎）、ステップ（標準）、ジャンプ（応用）という3つのコースにした。児童には、自分ができそうな問題を選んで解くことを促し、解答し、教師のチェックを終えた後、残りの問題も解きたい人は自由に解いていいことを伝えた。ほとんどの児童が、難易度を確認しながらコース問題を選び解いていた。自分でコースを選択できることと、無理のない量にしたことが児童の意欲にもつながったと考える（写真9）。



写真8 タブレットで練習問題（第4時）

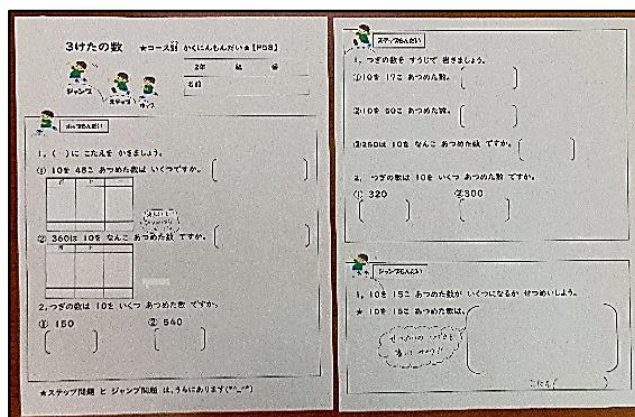
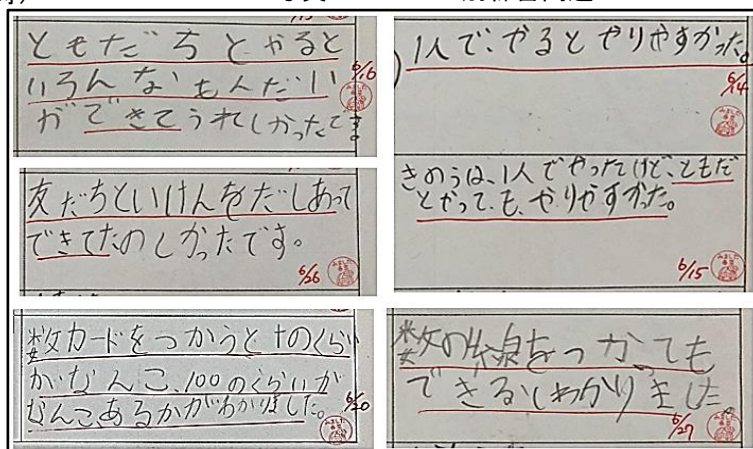


写真9 コース別練習問題

資料4の児童の振り返りシートでは、自分に合った学びの方法を選ぶことで気づいたことやわかったこと、できるようになったことが記述されていた。このことから、学習のゴールに向かう方法を児童自身で選択することは、その子自身の新しい学びの方法の気づきになり、多様な考えに触れることができる機会になっていると考える。

「勉強の仕方が上手だと思う」という質問に対し、検証前と検証後では、「よくできている」が4名増えた。「あまりできていない」「できていない」と回答した児童が2名減った。「よくできている」と「できている」の合計で大きな伸びは見られなかったが、UDLを取り入れた算数をすることによって、児童が多様な勉強の方法を知り、自分の学び方として活用できたと考えられる（図3）。資料5は、検証後の児童アンケート（記



資料4 児童の振り返り

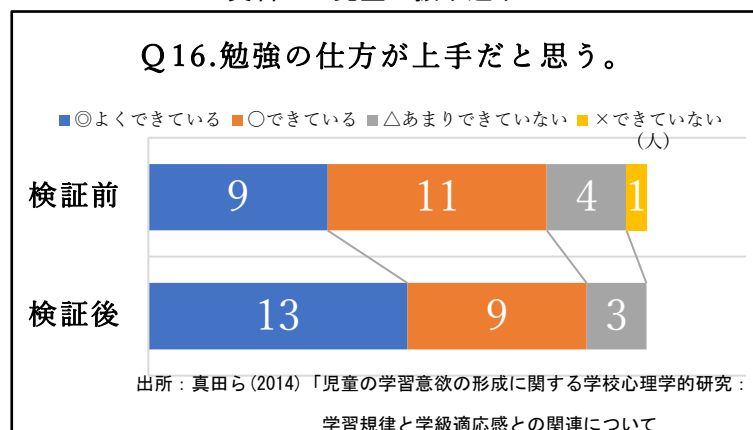


図3 検証前・後の児童アンケート

述)である。「タブレットで勉強」や「お友達と考えると」、「教材の活用(クリップ、数カード等)」を勉強の方法としたら、学習のゴールへ向かうことができ、自分の理解につながったと児童自身でも体感できたような内容の回答が多くみられた。一方で、学びのゴールに向けて、自分に合った学びを選択できない児童も数名いた。今回の実践では、個別に児童に声をかけ、何に困っているのかを聴いて対応したり、オプションの選択に寄り添ったりした。自ら動けない児童への対応やオプションの準備は今後の課題であると考え

Q.算数の学習でわかりやすかった勉強の方法とどんなところがよかったのか、教えてください。(記述式)

- ・タブレットでやるとわかりやすい。
- ・グループで考えたり、教えあったり、助け合ったりすることができた。
- ・本物のクリップと紙で考えるとわかりやすかった。
- ・お友達と考えると頭に答えがすぐ浮かんでくるから、一人よりましだと思いました。

資料5 検証後の児童アンケート

今回の検証授業を参観した担任は、「UDLを取り入れる前は、学習活動を教師が指示して、教材・教具も決まったものを使わせていた。それによって考えることに受け身になっていたり、グループ活動では、友達に任せっきりになったり、児童や話し合いに参加できない児童もいたという。今回の検証授業でUDLを取り入れた授業では、学ぶスタイルを自ら選べることで児童の能動的な動きが印象に残っている」と述べていた。さらに、学習が苦手な1人で勉強に取り組むことが難しい児童は、友達と一緒に話し合いに参加し、それをみんなの意見として発表したり、自分のできることを役割として行い、学習活動へ参加する様子が見られた。文字を書くことが苦手な児童は、タブレット学習を選択して練習問題に励む様子も見られた。学ぶために多様な選択肢があることで、児童が主体的にもなるし、これまで学習へ気持ちが向かなかった児童は、気持ちが向いていく様子が見られたと、児童の様子を感想として教えてくれた。写真10は、本検証授業(第9時)の児童の様子で、自分に合った学びを選択し、学習のゴールに向かっていく様子である。

UDLガイドラインチェック項目 (1.1) (1.2) (2.5) (3.3) (4.1) (9.1)



写真10 自ら選択し、学びに向かう様子

3 教師や友だちの話を聴いたり、自分で考えたり、発表したりなどして、意欲的に授業に参加しているか

UDLを取り入れた算数の授業の実践を通して、自分に合う学びを選択できることで、児童一人一人の学びに向かう姿勢や主体性がどのように変容していったかを分析する。「授業中、授業に関係の

ない話はしていない」と聞いたアンケートの結果では、検証後には、「よくできている」「できている」の人数が合計で3名増加し、「あまりできていない」「できていない」の人数の合計が3名減少した（図4）。このことから、学びのゴールに向けて児童自身で学びのスタイルを選び進めることで、主体的に学ぼうという意識が高まったことがわかる。実際に授業でも、1人や複数で考える場面では、みんなの目的が同じなので、授業に関する話し合いは積極的に行っていたが、私語をする様子はほとんど見られなかった。このことから、学びに向かうための方法が多様で選択できることは、児童にとって学ぶ意欲を高めることがわかった。

さらに、「自分の意見を発表することができている」という質問に対し、検証後には「できていない」と回答した児童が4名減少した（図5）。それは、検証授業の発表する場面でも、友達と一緒に考えを発表したり、発表できなくても、自分の意見が反映されたものを代表が発表したり、ICT活用で考えを発表したりなど、多様な方法で行ったからだと考える（写真11）。発表に苦手さを感じていた児童が、検証授業を通して、発表にも様々な方法があり、自分の意見を表出できる方法があることを経験できたのは、有意義だったと考える。これから継続して取り組むことで、他の教科にも生かすことができると考える。また、検証授業で、学びの方法を主体的に選択し、自分に合った学び方がわかり、これからの学習に求めるものを児童に聞いてみた結果から、一番多かったのが、「タブレットの活用」であった（資料6）。今回の検証授業でICT機器の活用を取り入れ始めたことで、文字を書くことが苦手な課題に取り組めない児童が、タブレットを使うと解説動画や練習問題を進んでやる様子が見られた。しかし、タブレットを活用する場面（授業）が多く持てなかったため、これからは学びの選択肢として常時準備できるようにしていきたい。また、「友達と」、「1人で」など学ぶ場を回答する児童や、「書くのが苦手なので、減らしてほしい」等、自分のことについて触れ、できる方法を求める回答もあった。この貴重な児童の声は、今後に生かしていきたいと思う。

UDLガイドラインチェック項目 (1.1) (2.5) (4.1) (7.1) (7.3) (8.1) (9.1)

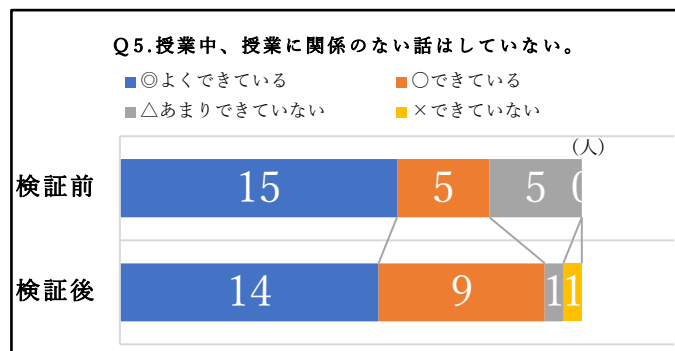


図4 検証前・後の児童アンケート

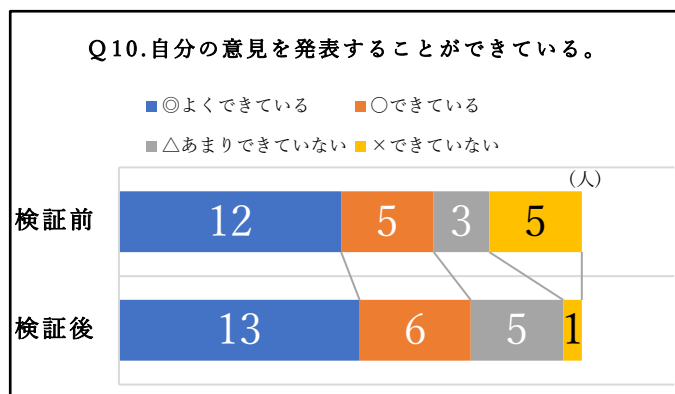


図5 検証前・後の児童アンケート



写真11 友達と協力して発表

- Q.これからの学習で自分が勉強しやすくなるために、授業でどんなことをしてもらいたいですか？(記述式)
- ・タブレットで(解説)動画を見たり、問題をとくことしたい。
 - ・タブレットで勉強したい。
 - ・1人でやるより、友達とやる方が勉強がわかりやすい。
 - ・グループを作って、人の意見を聞く。
 - ・1人でやりたいです。
 - ・書くのが苦手なので、減らしてほしいです。
 - ・発表が苦手だから、友達と発表をしたいです。

資料6 検証後の児童アンケート

VIII 研究の成果と課題

1 研究の成果

- (1) 児童の実態を踏まえ、学習の取組ませ方を児童自ら選択できるようにすると、主体的に考えて動く様子が見られた。
- (2) 自分の学びやすい学習スタイルに気づく児童の様子が見られた。また、学習内容によって学ぶスタイルを変えたり、どんな方法が自分に合っているのか試したりする児童もいた。
- (3) 学びのゴールに向かうために、児童自ら選択できる場（思考する、発表する、練習する等）を設けることで学ぶ意欲が高まったことが、授業の様子や振り返り、アンケート等からわかった。

2 今後の課題

- (1) 主体的に学びを進めることができない児童がいた。今後はすべての児童が学びにアクセスしやすくなるようにさらに児童の実態把握を行い、授業準備や学びの場の提供等を進める必要がある。
- (2) 学びの方法のためのツールの1つであるICT機器は毎時間の活用ができなかった。児童の特性への対応や意欲の向上に繋がったと感じたので、今後は積極的に継続して活用することを進めていきたい。

〈主な参考文献〉

桂・石塚・廣瀬・小貫

『授業のユニバーサルデザイン V o l . 12』

東洋館出版社 2020 年

甲原洋 『月刊 実践障害児教育 3月号』

学研教育みらい 2019 年

トレシー・E・ホール、アン・マイヤー、デイビット・H・ローズ編、バーンズ亀山静子訳

『UDL 学びのユニバーサルデザイン』

東洋館出版社 2018 年

文部科学省 『小学校学習指導要領解説 総則編』

東洋館出版社 2018 年

文部科学省 『小学校学習指導要領解説 算数編』

日本文教出版 2018 年

C A S T 『学びのユニバーサル（UDL）ガイドライン全文』

<<https://udlguidelines.cast.org/binaries/content/assets/udlguidelines/udlg-v2-0/udlg-fulltext-v2-0-japanese.pdf>>

(2023/04/19/アクセス)

文部科学省 『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して ～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協同的な学び実現～（答申）』

https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf (2023/04/20/アクセス)

文部科学省 『特別支援教育の充実について』<<https://www.mhlw.go.jp/content/001076370.pdf>>

(2023/05/12/アクセス)

文部科学省 『通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査』

<https://www.mext.go.jp/content/20230524-mext-tokubetu01-000026255_01.pdf>

(2023/05/12/アクセス)